

子供とともに生と死を学ぶ

記録すくめの特別暑い今年の夏、世の中は気温以外にも息苦しくなるような状況にあります。その原因の一つに、今の子供達が生と死を理解できていないのではないかとこの問題があります。先日、長崎佐世保の小学生による殺人事件がきっかけとなって、政府は中央教育審議会に死を教えることに関する専門部会を設置して検討するそうです。

そこで、お盆というご先祖様をお迎えしてごく自然に死について考えることのできる時期に、また、中高生と日々接している経験から、今の子供や青少年の現状を考えてみたいと思います。

学校では「命の大切さ」を教える教育をしてきたのに残念であるというコメントを耳にされたかと思いますが、公立の学校でとらえる「命」は、政教分離の原則により科学的な知識という一見きわめて明解そう、実はあいまいな抽象的な観念を教えるざるをえないのだと思います。また、科学的にとらえる「生命」に関するすべてに対して、人間の自然科学の領域での探求は最終的な答えを得ていません。ということは、死について十分な答えを用意しないまま、子供達に生き物とふれあうことを体験させても、生を体験させることにはなっても、死を理解させるものであるかどうかは疑問であるということです。

生とは死とは何であるかという問いかけには、太古から人類の歴史において、様々な宗教や文化のなかで、その数だけのそれぞれの答えが存在します。今、日本の社会で問題となっているのは、大人なら知って当然のはずの生と死に対する答えを子供や青少年達が、知っていないのではないかとこのことです。だから学校で死を教えねばならないということなのですが、さて、本当に今の大人は答えを知っているのでしょうか。宗教を離れて死を教えることが果たして可能でしょうか。

近頃、新渡戸稲造の著書『武士道』がブームだそうですが、そのなかで、欧米と異なり日本の学校では宗教教育をおこなっていないが、それでは倫理や道徳を教えられないのではないかとこの欧米の碩学の質問に対して、日本には武士道があり、その根底には仏教・神道・儒教の教えがあるのだと答える箇所があります。

武士道が見失われた社会だから再評価のブームが起ったのであり、であるならば、その根底にあつた仏教・神道・儒教の教えが、倫理性とともにその教義も大きな影響力を持たなくなったためにこの問題があるともいえます。

そうであるならば、今後、公立学校において宗教的伝統と文化を基盤とした死の教育を期待できるのかという疑問は解消されないでしょうし、さらに、教室で教えるやすい新たな死の概念の創造によって、安直に問題解決が図られようとする可能性があるならば、根本的な事態の改善は期待しえないと思います。

今回、事件でインターネットのホームページやゲームが問題視されていますが、今、高三の生徒に趣味を書かせる単にゲームと書く回答が目立ちます。無論、ゲームとはパソコンや専用機で遊ぶゲームを意味します。ここでは、バーチャルリアリティ（仮想現実）としての繰り返し返される膨大な死の体験が存在し、ベストセラーの養老孟司先生の『死の壁』でも指摘される、遠ざけよう隠そうとされる実感のない現実の死は、彼らの意識の外にあります。ゲームを作って与えているのは大人達であり、利潤追求をはかる資本主義社会です。学校や社会に過大な期待をするよりは、ご家庭で家族揃ってお盆にご先祖様をおまつりするところが教育に関して自己責任を果たす絶好の機会だと思えます。実体験として手を合わせ、自分の生命の起源をたどってご先祖様に感謝し、自らの生命の尊さを知り、死とは何かを考えることで、そして、だれでも避けられない死は、阿弥陀様の西方浄土に往生することなのだとして理解すること、神仏を敬うことを学び、倫理的な規範が自然と身に付くことにもなります。今の時代だからこそ、お盆やお彼岸には、是非、ご家族揃って手を合わせる機会を持って下さい。

